

審査結果の要旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

的確な学校救急処置の実施は養護教諭の主要な役割の一つである。しかし、実際の子供たちの傷病の緊急度・重症度判断において、「情報収集から判断に至る考え方の道筋が繋がっていない」ことに課題がある。ところが、この問題認知から対応に至る養護教諭の思考プロセスに対する研究は、これまで行われてこなかった。

したがって、丹氏が行った本研究は、養護教諭の実践から発想されたアイデアであり、3つの研究を通して養護教諭の思考プロセスの課題にチャレンジした研究として独創性があり、養護教諭の養成教育、現職研修において意義深い研究である。

この研究の目的は、まず「重症事例調査」（研究１）で、学校救急処置における緊急度・重症度判断の「情報収集から判断に至る考え方の道筋が繋がっていない」という養護教諭の思考プロセスの問題の所在を明確に指摘すること、次いで「仮説演繹法による臨床推論」を理論的枠組みとして用いた「思考プロセス調査」（研究２）により、思考プロセスの類型を明らかにすることである。さらに、これらの成果を踏まえて、情報収集から判断に至る考え方の道筋を繋げられる養護教諭を養成・研修するために、「仮説演繹法による臨床推論」を適用した教材を作成し提案することである（研究３）。

このように丹氏の研究は、調査研究の成果を養護教諭の養成教育や、現職教員の研修で活用できる教材作成に発展させた点において、実践的意義を高く評価でき、研究と実践の往還を実現したモデルとなる優れた研究といえる。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究で用いられた統計的分析方法、研究デザインは、養護教諭の実践的研究の領域における研究として、よく工夫されており、適切である。

研究１では、結果的に緊急対応すべきであった重症例を取り上げ、どのような観察に基づいてどのような判断（対応）を導いているのかを調査し、「情報収集」（観察項目）と「判断」（緊急対応の判断）のつながりを検討している。具体的には、緊急対応群と非緊急対応群の判別に寄与する観察項目を判別分析により明らかにした。

研究２では、養護教諭が保健室で対応した学校救急処置事例のプロセスレコードの記述内容を収集し、「仮説演繹法による臨床推論」を理論的枠組みとして分析し、6つの類型を得ている。この方法は、思考過程という意識化が困難な内的事象にアプローチするため工夫された質的研究方法であるといえる。

研究３は、教材開発であるが、4つの傷病ごとに「重症例」と「頻度が高い」の2種類の「仮説例」を思考プロセスに添って図示し、仮説形成・検証に必要な情報と収集する理由、重要用語について解説し、「仮説演繹法による臨床推論」が学べるよう工夫された教材となっている。この教材の開発過程において、実現可能性を高めるため現職養護教諭の意見に基づく改善、医

師による医学的妥当性の検証，数回のトライアル授業の実施と開発プロセスの評価を行っており，妥当な方法である．

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究におけるデータ収集と分析は，良く工夫されており，限界を踏まえながらも，適切に行われていた．

研究１では，中国・四国・九州地方の４つの県にある公立および私立の小・中・高・中等教育・特別支援・高等専門学校等に勤務する養護教諭 3,200 名を対象とし，郵送調査法による無記名選択式質問紙調査でデータを収集している．収集したデータは，「腹痛」「頭痛」「頭部外傷」「四肢外傷」の重症事例であり，（２）で述べた通り目的に適ったデータであり，適切に分析されている．

研究２では，（２）で述べた通り，Ａ県の小中高等学校および中等教育学校 541 校の養護教諭を対象に研究協力者を募集し，同意が得られた 56 名から緊急度・重症度判断のプロセスを記述した無記名のプロセスレコードをデータとして収集している．このデータを「仮説演繹法による臨床推論」を理論的分析枠組みとし，小児救急看護に関する質的研究に精通している研究者と独立に分析し，類型の一致率が 90%以上に達するまで検討を重ねている．データ収集も目的に適っており，質的分析も共同的な確信（間主観性）を確保しており，妥当である．

研究３の分析の妥当性は，（２）で述べたとおりである．

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか

本研究の知見，知見を踏まえた考察と結論は，養護教諭の実践から発想された３つの研究を通して得られたものであり，十分に意義を認めることができ，学術水準として高いレベルに達している．

研究１では，緊急対応群と非緊急対応群の判別に寄与する観察項目の分析から，観察内容に差異がないにも関わらず，判断・対応に差が生じている「腹痛」は，「観察」そのものではなく，判断に至る思考過程の論理的なつながりに問題があると考察している．頭部外傷事例の情報収集では「けいれんの有無」「受傷時の状況」，頭痛事例の情報収集では「脱力感や失神」「脈拍」の観察項目は，予後を推測し重症例を見逃さずに対応するために重要な情報であると考察している．これらは，養護教諭の思考過程の論理的なつながりにおける問題の所在を明らかにすると同時に，「仮説演繹法による臨床推論」を用いた教材の題材となるなど，妥当な結論である．

研究２では，思考プロセスの類型化を試みた結果，仮説形成は 56%に認められたが，その中でも「重症例」が想起できていた事例は 6 割弱で，残りの 4 割の事例における仮説は「重症例」が想起できておらず「軽症例のみ」で，見逃してはいけない重症例の推測ができていないと考察している．また，仮説形成や仮説検証が認められなかった養護教諭はどのように思考，判断しているか，適切に考察している．

研究３の教材開発は，今後発展させる実践研究であるが，適切にトライアル授業による検討

と開発プロセスの評価を行っており、「情報収集から判断に至る考え方の道筋をつなげることができる」養護教諭を養成できる可能性を有する教材であるとの考察は適切である。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究の成果とその意義は、博士（教育学）の学位取得に十分値するといえる。

丹氏の研究は、養護教諭を対象に、学校救急処置における緊急度・重症度判断の思考プロセスの問題点を明確にし、「仮説演繹法による臨床推論」に基づいた「思考プロセス調査」から、6つの類型を明らかにした。これらの成果を踏まえて、情報収集から判断に至る考え方の道筋を論理的に繋げられる養護教諭を養成するために、「仮説演繹法による臨床推論」を用いた教材を作成し提案した。これらの一連の研究は、養護教諭の実践から発想されたアイデアに基づいており、養護教諭の思考プロセスの課題にチャレンジした研究として独創的であり、研究と実践の往還を実現したモデルとなる優れた研究である。